

信毎俳壇 坊城俊樹選

雁風呂や私信したたむ北の宿
 (上田市) 田名綱 剛
 飾り終へしまふ雛の闇おもふ
 (南相木村) 猿谷 秀
 薩摩揚げいびつにできて春隣
 (佐久市) 水間喜美子
 夜半の雪幾尺寸の積もるらん
 (佐久市) 柏木 利晴
 踏まれても潰れてもなほほ露の臺
 (飯田市) 吉沢 奨
 満天の星と語らふ枯野宿
 (松本市) 後藤なつな
 まだ物の言へぬ児が指す犬ふぐり
 (佐久市) 高岡 徹
 窓を拭く春愁の良く見えるよに
 (長野市) 斎藤 俊幸
 娘への荷にしはばせる雛あられ
 (長野市) 宮沢 朝子
 瞑想の座禅道場春日差し
 (中野市) 茅川 菊水
 佳作
 春愁や遺品のページめくく音
 (佐久市) 町田ゆかり
 立子忌や命惜きはこの我も
 (飯綱町) 坂井 寿男

選評
 一句目、雁風呂とは帰れなかった雁が残っていた木片を焚いて入る風呂のこと。そんなことを思いつつ書いた手紙。誰への私信なのだろう。どこか切ない。二句目、着飾った雛たちも祭りが終わればしまわれて闇の中で眠る。それはどんな気持ちなのかと思う作者。三句目、もう春ともなるとさつま揚げも歪になるのだ。その理由は分からないが何とも楽しく揚げられている様が見えてくる。

今井聖選

地下足袋の女子の太鼓や春兆す
 (小海町) 井上 英一
 浅間山に着取られ近きぬ耕して
 (上田市) 竹内 創造
 凍滝のふてふてとして寄りつけぬ
 (長野市) 大島 昇
 孀婦として水車を廻す春の水
 (箕輪町) 向山 政俊
 信州の膳たる湖の桜魚
 (長野市) 武田 芳子
 沢庵に田空仏の楊枝かな
 (飯田市) 吉沢 奨
 佐保姫に百獣百花の供ありぬ
 (長野市) 宮沢 朝子
 傾きて仏立ちある雪野かな
 (飯綱町) 坂井 寿男
 春の月山の端温め出でにけり
 (上田市) 竹内 重美
 薄氷に吾が影重ね告白す
 (大田市) 原田 勝
 佳作
 如月の癩検診や脇に汗
 (小諸市) 佐藤ゆきな
 ワイパーの格闘続く春の雪
 (阿南町) 宮嶋 良光

選評
 一句目、地下足袋の女子が太鼓を打っている。華やかで力強い。春の訪れにぴったりの風情。二句目、耕作をしながらいつも浅間山を眺め、その山に着取られながらこの世を去る。「着取られ」の比喩が出色。三句目、凍滝を「ふてふてしい」と形容した句に初めて出会った。言われてみるとそう思えてくる。四句目、春の水を擬人法の主語にした。季節の躍動感がよく出ている。

神野紗希選

蕨餅を珠なる蜜や阿頼耶識
 (小諸市) 加藤 陽介
 ノゲン咲く農具の小屋にさす朝日
 (長野市) 小白向栄子
 花林橋濡れて夜空の底にあり
 (松本市) 滝沢征矢子
 木曾馬のまつ毛に暫し春の雪
 (箕輪町) 向山 政俊
 スケボーの少女春光翻す
 (松川村) 岡 豊村
 冬將軍去る日も星を蹴散らかし
 (高山村) 春日きみ子
 強欲な人類笑つ孕み鹿
 (高山村) 五味 力
 跳ね返す竹の弾刀ぼたん雪
 (大桑村) 木戸口信幸
 雪野原歩くたび首符産まるる
 (飯綱町) 小林 紀子
 ぼた山に水撒く人や春一番
 (佐久市) 木内利一郎
 佳作
 サバ缶を舐めて出かける猫の恋
 (上田市) 香枝 流
 とろけあふラテと春日やカフェの午後
 (上田市) 中野 康子

選評
 一句目、蕨餅のきなこが黒蜜をころころと丸く弾くさまを的確に描写した。さらに、阿頼耶識とは仏教用語で、個人の意識の最深層のこと。甘く黒々と艶めく蜜が、人間の深部の豊穢の闇と響き合う。二句目、たくましく咲くノゲンに、耕す暮らしの実直に、新たな朝が巡りくる。飾らない詠みぶりが素朴で誠実だ。三句目、「夜空の底」という詩的表現。清らかな白と、濡れた命のみずみずしさと。